

勝林寺

八月 勝林寺 予定

前住職初盆法要の(+)案内

四日(土) 兼井康邦宅 初盆

五日(日) 弘道校区 戰没者追悼式
岩上悟宅 三・七回忌

山田輝幸宅 初盆

摂取・心光常照護

已能雖破無明闇

貪愛瞋憎之雲霧

常羅真実信心天

「命に危険のある暑さ」が続き、聞きなれない言い回しのこの言葉がきっと今年の流行語大賞になるのだろうと思っています。大雨の災害・猛暑の災害・台風の災害・地震の災害と続けざまの自然災害の中で、私たち文明の利器に勝ち誇った人間が失った、畏敬の念を呼び覚ませているようです。

夜も寝苦しい熱帯夜が続いていますが、勝林寺の裏には川が流れています。明け方前に涼しい風がそよそよと吹いてきます。イギリスのことわざでは「夜明け前が一番暗い」というのだと

うですが、深い闇が明ける頃に目が覚めると夜明けを予感するように涼しい風が吹き、一瞬だけヒグラシが鳴いて夜明けが来ます。最近はこんな時間に目を覚ますことが多く、周りの迷惑にならないよう「(+)」そりと本を読んだりしています。

私たちの人生も長い長い夜を繰り返し生き続け、お念仏に出合つことで深い無明の闇が破られ、仮の光に照らされる夜明けを迎えます。そ

れでもなお私たち凡夫は朝日を遮る雲や霧に閉じる心が私たちに眞実信心に触ることを遮るようにはならないのです。「貪愛」と「瞋憎」二雲や霧の如きものだと親鸞聖人はうたわれています。

「貪愛の心」とは自分に気に入ったもの、欲しいものを際限なく貪(むさぼ)り、独り占めして放そとしない心です。親鸞聖人も「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し」と自らの性分を嘆き悲しまれています。愛しいものを思う心は人生の生きがいとなり、豊かさとなると同時に、恨み憎しみ悲しみの種となっています。そして「瞋憎の心」は自分の気に入らないもの、反発するもの、理解できないものに瞋(いかり)を感じ、憎しみを抱いて、攻撃し、戦い、抹殺してしまおうとする恐ろしい心です。この

二つの心は、たとえ阿弥陀様の本願を聞信して、新しい夜明けがすでに訪れたとしても、私たちが生きていく限り、太陽の光を遮る雲や霧のように繰り返し眞実に生きる歩みを妨げるのです。

愛が仏道の妨げになるのだという教えは、もともとはお釈迦様の出家の時の逸話に見られます。お釈迦様は出家をされる以前に結婚されていて、出家する前にお妃が妊娠していることを知らされます。そこでその子供に「ラーフラ」という名前を付け、王位を捨てて出家されてしまいます。「ラーフラ」とは「障礙」という意味で、自らの仏道を歩むにあたっての妨げとなるものだという意味なのでしょう。この息子もまた後にお釈迦様の弟子となり仏道を極められるのですが・・・私の娘にもこのような気持ちから「キリ(希望)」と名前を付けています。

(文責 住職)

全戦没者追悼法要並びに		
内容	期日	前住職初盆法要の(+)案内
前住職初盆法要並びに納骨式	平成三十年八月八日(水) 午後二時より	例年お勤めしております全戦没者追悼法要にあわせて、前住職の初盆法要並びに納骨式を左記の要項でお勤めいたします。どなたでもお参りいただけます。ご都合のつく方は、ぜひ、お参りください。なお、法要終了後、短時間ですが、のどを潤しながら、お菓子をつまみ、前住職の在りし日の姿をしのぶ時間をとりたいと考えています。合わせて、(+)案内いたします。
前住職初盆・納骨式	一〇日(金) 角折幸江宅 初盆	八日(水) 勝林寺 戰没者追悼法要
前住職初盆・納骨式	一一日(土) 出石A盆	九日(木) 渋谷厚志宅 初盆
前住職初盆法要	一二日(日) 出石B盆	一〇日(金) 永井道則宅 初盆
前住職納骨	湯口孝司宅 初盆	一一日(土) 石田和俊宅 初盆
前住職をしのぶ会	湯口博宅 五〇回忌	一二日(日) 出石C盆
仏婦・子ども研修会の(+)案内		
子どもたちは勿論、仏婦会員さん、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒に、仏さまのことを学びましょう。一緒に工作したり、そうめん流しをしたりして、暑い夏を涼しい本堂(?)で過ごしましょう。お待ちしています。	一四日(火) 一五日(水) 一六日(木) 一七日(金) 一八日(土)	一一周忌 稻葉保夫宅 坪木昌宅 初盆 岩出みつゑ宅 初盆 宮篤義明宅 二十五回忌
内容	平成三十年八月十九日(日) 午前十時から午後五時まで	出石組声明研修会
内容	一九日(日) 二〇日(木)	勝林寺 子ども会 地蔵盆
内容	二六日(日)	みのりを聞く会
(敬称略)		

終戦の日に思つゝ」と

今年も酷暑の中、八月十五日の終戦記念日が近づいてきました。今日は日本人の人々で、日本が戦争に敗れた日のことと思い出す人は、ほとんどないでしょう。まして今日の若者の中に、かつての日本が、中国・アメリカ・イギリスなどと、戦争をしたことすらも、知らない人がいるのです。

あらためて歴史の流れの早さを思わずにはおれませんが、私にとっては忘れがたいこの日であります。

私は、一九四五年七月、大学一年生の時、一八歳で徴兵されて北海道の旭川の部隊に入りました。まもなくしてアメリカの艦載機が、しばしば兵舎を襲撃するようになり、機銃掃射の弾丸のあと、必死に応戦いたしました。いま思うと、よくも死なずに生き残えたものだと思うことです。この戦争によつて、私の友人は多く死んでいきました。戦争の悲惨さを思わずにはおれません。

この戦争をめぐつて、いつまでも私の心にわだかまり、けつして忘れえない思いがあります。それはすべて戦後になつてはじめて知つたことですが、当時すでに、日本の敗戦が決定的であつた一九四五年七月二十六日に、アメリカ、イギリス、中国、ソビエトの四国が、ドイツのポツダムにおいて会議を開き、日本に対する戦争降伏の条件を提示しました。その内容は、日本の軍隊の解体、本州、北海道、九州、四国のみを日本の領土とし、民主主義の政治を完成させることでした。

当時の日本政府は、もはやこれ以上は戦争はできないと判断し、それを受け入れようとしましたが、天皇制の護持を主張する者がいて、そのことをめぐつていろいろと交渉を続けた」と

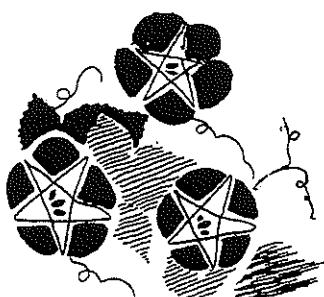
から、戦争の終結が延期となり、八月六日には広島に原子爆弾が投下され、またその九日には長崎にも投下されて、満州に進撃を開始し、在留日本人が十八万人も死亡したといいます。

もしももつと早く、戦争の終結を表明しておれば、広島、長崎の原爆投下もなく、ソビエトの参戦もなかつたわけで、多くの日本人の生命が犠牲にならずにすんだわけです。結局は、天皇制を擁護するために、これほどまでの、多く人々の生命を犠牲にしたのです。

このたびのアジア・太平洋戦争は、天皇が始めた戦争です。しかし戦争に敗れても、その責任を負うこともなく、その天皇制を守るために、日本国民の生命が、これほどまでに多く犠牲になつたのです。私は改めて日本の政治というものが、私たち国民の幸福のために存在するのではなく、わずか一握りの特定の人々のためのものでしかなく、私たち国民は、そのためには、いつでも見捨てられるものである、ということを思はずにはいられません。

そういう現実についてはよくよく自覚し、これから日本の政治が、ほんとうに国民のためのものになるかどうか、よほど厳しく、監視の眼をもつづけねばならないと思うことです。

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



法語カレンダー八月
ほんが

凡夫はすなわち われらなり

どすん

ちょうどと時間が経ちましたが、今年も無事に永代經法要をお勧めすることができました。永代經をお勤めするにあたり、事前にお願いしました「おみがき奉仕」には、暑い中にもかかわらず、約四十五名の方々が、「われら」というのですから、私だけが凡夫ではありません。わたしもあなたも凡夫だというのです。私たちの身には、煩惱が満ち満ちており、貪欲（自分の思い通りにしたいといふ）瞋恚（怒りや腹立ち）愚痴（愚かさ）という、三毒の煩惱がひつきりなしに沸き起つてしまい、それは娑婆の縁尽きるその最期の瞬間までできることがないというのです。私は煩惱がないと自信を持つて語ることが出来る方は、なかなかいないと思います。煩惱があることは認めます。けれども、煩惱が常にあると認めることはなかなか難しいですね。すがすがしくはなく、わずか一握りの特定の人々のためのものでしかなく、私たち国民は、そのためには、いつでも見捨てられるものである、ということを思はずにはいられません。

ところが、皆さんのおかげで庭も本堂も美しく整え、立派にお荘厳し、法要を迎えた私は、少し考え込んでしまいました。それは、一日日の夜座は、用意した席がほぼすべて埋まるほどお参りでしたが、二日目の昼座は、空席が目立つのが寂しいからと席を一列減らしました。皮肉にも、奉仕に来てくださった人数の方が、肝心のお参りの方の数よりも多くなつてしまつたのです。どうしてだろう。私なりに考えてみます。私たちの煩惱が常であると同時に、阿弥陀様の大いなる慈悲の心も常なのです。

一日二十四時間のうち、私たちから阿弥陀様を思う時間は、それほど多くはありません。けれども、阿弥陀様は、片時も離れずに、いつも、常に、私と共にいてくださるのです。凡夫であるわれらとともにいてくださる阿弥陀様なので、いつも、阿弥陀様があるから……と、煩惱を言ひ切ることは、門徒として当然の勤めである、阿弥陀様への感謝の気持ちである」と皆さんは考えてくださいました。お参りの際は、美しい豊かに整つたお寺は、多くの方に喜んでいただけます。日ごろ掃除のできていない私には、特にともありがたいです(笑)。でも、阿弥陀様が一番喜ばれるのは、実は、皆さんがお参りしてくださることです。お聴聞し、わが命の尊さに気付いてくださることです。「気づいてくれるけれども、この恥ずかしい私に片時も離れず、煩惱の私を放つておけずに常に見守り、傍に寄りそつてくれる阿弥陀様のお心を、大切に聞くことがあります。本堂に座り、手を合わせ「南無阿弥陀仏」とおとなえましょう。ただそれだけ、ただそれだけでいいのです。(文責 坊守)